

# エジプト・アラブ共和国の保育園における「遊びを通した学び」の導入による変化 — JICA 技術協力プロジェクトモデル園のインタビューより —

Nursery Teachers' Impact by Intervention about "Learning through Play":  
from JICA Project in Egypt

川村 幹

Miki KAWAMURA

鳴門教育大学

Naruto University of Education

## 要約

エジプトで行われている「就学前教育の質向上のための技術協力プロジェクト」では「遊びを通した学び」の技術移転を取り組みの一つとしている。このプロジェクトではエジプトの教育全般の質向上のために日本とエジプトの政府間で結ばれたパートナーシップに基づくものである。エジプトの人口増加にともなう就学前教育への就学率の低さ、質の低下、システムの見直しなどが行政を中心になされ日本との協力で「遊びを通した学び」を取り入れていく方向で動いている。一方、学歴社会であるエジプトでは、就学前教育に望むものは小学校進学の前準備期間として文字や数字を授業形式で学ぶことである。新しい教育手法が導入された保育士はその手法からどのような変化がおこったと捉えているのかを、インタビュー内容のSCAT分析により明らかにした。結果、3つの変化と2つの課題が浮かび上がった。

キーワード：エジプト、就学前教育、遊びを通した学び、SCAT、JICA 技術協力プロジェクト

## 1. はじめに

エジプトと日本のパートナーシップに基づき、幼児教育の技術協力プロジェクトが2017年6月から2021年3月終了の予定<sup>1</sup>で実施されている。

エジプトの保育・幼児教育の質向上を目指し「遊びを通した学び」を現地の保育園に広める技術協力を行っている。プロジェクトの上位目標として「『遊びを通した学び』を通じてエジプト国内の保育園における保育の質が向上し、乳幼児の発達を促す」ことを目指している。

当プロジェクトは過去20年間に派遣された青年海外協力隊の活動の積み重ねの上に組まれている。プロジェクト介入を受け入れているモデル園の中には日本

の幼児教育との関わりを持ち続けている保育士もいるが、すべての保育士が該当するわけではない。また、学歴社会を背景に、保護者の保育園へのニーズも指導による学習が主である。その意味で、それまで保育士が文字や数字を授業形式で教える指導中心型保育を行ってきたエジプトにとって「遊びを通した学び」はまだ、新しい学習アプローチであるといえる。そうした中でエジプトのモデル園の保育士は「遊びを通した学び」における「遊び」について、どのように捉えているのかについて、半構造型インタビューで実施し、それまでの保育との変化や、保育士が受けた影響について調査した。

<sup>1</sup> 初めの予定では2020年10月の終了予定であったが新型コロナウイルスの影響で現時点では5か月の延長を予定している。

## 2. エジプトの幼児教育の現状

エジプトはアフリカ北部に位置するアラブ国家であり、人口約1億人であるとされている。人口増加率は2.0%で、人口ピラミッドもきれいな三角形である。

子どもたちは0歳から4歳までは福祉を担当する社会連帯省が管轄である保育園に、4歳から6歳は教育省が管轄である幼稚園に通うことになる。

0歳から4歳児の中の約733,899人の子どもが保育園に通っており、在園率は7.4%となっている。

保育園はNGOが運営しているものと、私立のもの、工場や企業付きのものがある。保育園の数は毎年増え続けており、2015年の時点でNGOの保育園は11,901園、行政から支援を受けているNGOの保育園は4,847園、私立保育園6,954園、工場・企業等の保育園100園となっている。(国際協力機構 事業事前評価表)

保育士になるには特に資格は必要なく、どのような分野を大学で学んでいても、さらには大学や専門のコースを卒業していなくても、保育士になることができる。

そのエジプトの中で現在問題となっているのは急激な人口増加に伴う就園率の低さ、保育園の急激な増加や十分な知識を得ていない保育士が実施することによる、保育の質の低さが指摘されている。

エジプトの社会連帯省は上記に加え、保育園に関する問題を①就学前教育における認知能力・運動能力・社会性・情緒発達の重要性への理解不足、②保育園における保育方針・カリキュラムの理解、専門的な保育実践を包括的に支えるシステムの未整備、③保育サービスの提供・モニタリングを担う専門的な枠組みの不足とまとめている(国際協力機構2016)。

## 3. プロジェクト内容

JICA技術協力プロジェクトである「就学前教育と保育の質向上プロジェクト」は2016年のエルシーシ大統領訪日の機会に発表した「エジプト・日本教育パートナーシップ」のもとに、実施されているプロジェクトである。また、当プロジェクトはJICAとして就学前教育分野の技術協力プロジェクトとして初のものである。エジプトでそれまでに約70名派遣されてきたJICAボランティアによる幼児教育分野における草の根での介入の積み重ねを活かしつつ、始動しているプロジェクトである。プロジェクトの掲げる中目標は:

① Capacity of facilitators of nurseries to conduct

the learning though playing is improved,

- ② Monitoring system on nurseries is improved in order to ensure quality of nurseries, and,
- ③ Surrounding environment for implementing the learning through playing is improved.

の3つである。筆者が当プロジェクトにインターンシップをした2019年9月当時は、それまでの活動として、保育指針への提言、保育士のキャパシティビルディングサイクルとしての、保育者研修、コーナー遊び、砂遊びの導入、実践、絵本の提供、親子体操セミナーなどを実施し終えたところであった(国際協力機構ニュースレター2018年6・9・12月号, 2019年3・6月号)。

## 4. 調査目的

当プロジェクトでは遊びを通じた学びを実施する保育士の保育技術の向上を目指している。しかしながら、エジプトの保育園でそれまで実施されてきた保育は就学準備のために文字の読み書きや数え方などを指導から学ぶ指導中心型保育であった<sup>2</sup>。保護者のニーズとしても、就学前の準備期間として、「子どもに文字や数字を教えてほしい」というニーズが強いことも事実である。そのエジプトの就学前において「遊びを通じた学び」を導入することは、それまでの活動とは違う新しい教育方法であるといえる。

一方、幼児教育という領域の持つ特徴として、他の校種、教科よりその国や地域の文化を強く反映するものであり、介入には慎重になる必要が大いにあるとされている(浜野・三輪2012, p.290)。多くの取り組みを行っている当プロジェクトだが、その一部である「遊びを通じた学び」に焦点を当て、介入によって、裨益者はどのような変化や影響を受けていると考えているかを知ることが、介入の効果や今後の介入方法の検討について考えていく材料になり得る。

## 5. 調査方法

### 5.1. 調査対象

この調査では、現場でプロジェクトのモデル園として介入を受けている保育園の保育士が、その介入からどのような変化や影響を受けているのかを明らかにするため、半構造型インタビューを実施した。回答者詳細は表1の通りである。インタビュー当時は2019年9月であり、プロジェクト開始から2年3か月経過した段階である。

<sup>2</sup> ボランティア活動報告書においての隊員の記述をまとめると、エジプトの保育園では基本的にコーランや文字の読み書きなどを習得することを目的とした指導中心型保育が実施されていることが記されている(持田2008, 井上2008他)。

表1. インタビュー回答者

保育士①	30代 保育経験 10年
保育士②	40代 保育経験 7年
保育士③	30代 保育経験 10年

### 5.2. 半構造型インタビュー調査

基本的な質問事項は以下の通りである。

1. 保育士について（経験年数やその他情報）。
2. 「遊びを通した学び」を実施する際にどのようなことに留意しているか。
3. どのような活動が「遊びを通した学び」に当てはまるか。
4. プロジェクトから得た新しい発見や学びは？
5. 保護者のリアクションはどうか。
6. プロジェクトでの取り組みは就学後も役に立つと思うか。
7. プロジェクトでの取り組みは今後も続けていきたいか。

なお、質問は筆者作成の物をプロジェクトの現地スタッフに通訳してもらい、質問のたびに通訳を挟みながら適宜追加の質問を行い、やり取りをする形式であった。

### 5.3. 分析方法

インタビュー全体を録音し、さらに現地スタッフに英語に訳してもらい、それをもとにSCATで分析をした。

SCATとはStep for Coding and Theorizationの略称で、4つのステップを通じてコーディングをし、そのテーマや構成概念からストーリーラインを作成、そこから理論を記述する研究手法である（大谷 2019）。SCATは、コーディングの流れが明確であること、比較的小さなデータや自由記述にも使用することが出来ること、初学者にも着手しやすいという特徴を持つ。また、日本語でない記述の分析も可能なことから、本研究で用いた。

## 6. 分析結果

SCATを用いた分析から、4つのカテゴリが出現した。1：保育実践、2：保育士の役割、3：保護者意見、4：保育士としての向上の4つである。それぞれのカテゴリごとにまとめたストーリーラインと理論的記述、3人分を統合した理論的記述を以下に示す。なお、表中の【 】はコーディングで出てきた構成概念である。

### 6.1. 保育実践について

表2は保育士①によるインタビューを分析したものを示す。また、表3は保育士②によるインタビューを分析したもの、そして、表4は保育士③のインタビューを分析したものである。表5は保育士①、②、③の3人の理論記述を統合したものである。

表2. 保育士①の保育実践（保育の実施形態、子どもたちの活動および様子）

保 育 士 ①	ストーリーライン
	<p>遊びを通した学びについて、プロジェクト介入前は【バスケットやブロック】などを活動に取り入れることだと認識していた。しかしプロジェクトの介入を通じて、【砂場遊び】の様子から【子ども同士の関わりへの着目】をするようになり、遊びの中で社会性を習得していることを実感した。【形、サイズ、大小などについての学習】を【実体験を通じて理解】できるよう関わることで、そして【楽しい活動】や【友達とのつながり】を通じて、子どもにとって保育園が【好きな場所としての保育園】になる。</p> <p>遊びを通した学びは【新しい活動】であり、【子どものこころを広げる】ことができ、【興味関心を強め】、【保育園に対してネガティブだった気持ちがポジティブな感情】に変化していることが【子どもたちの態度の変化】からわかる。【子どもとのやり取り】も【スムーズ】になり、【作業効率も向上】した。</p> <p>【子どもと過ごす時間が平穏に変化】したこと【子どもたちが遊びに熱中】し【保育士の介入の減少】をプロジェクトから受けた影響であると認識している。</p> <p>砂場遊びを通した【手洗い習慣】の獲得、【形の学習】から【遊びの中の学びについて確信】を持った。</p>
	理論記述
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遊びを通して社会性を取得している。</li> <li>・就学前準備としての学び（形、サイズなど）について実体験を通じて得ている。</li> <li>・友達とのつながりや楽しい時間を通して、保育園を好きになる。</li> <li>・遊びを通した学びによって子どもたちは心を広げ、保育士との関わりもスムーズになった。</li> <li>・子どもが遊びに熱中することで保育士は介入することが減り、子どもと過ごす時間が平穏になった。</li> </ul>

表3. 保育士②の保育実践（保育の実施形態、子どもたちの活動および様子）

保育士 ②	ストーリーライン
	<p>遊びを通した学びの大切さに気が付いたのは【親として子どもを見つめる】ことで【子どもが自然に求めるもの】を理解できるようになったからだという。</p> <p>遊びを通した学びには【子ども間での役割分担】があったり、【保育園での経験についての表現遊び】【思考・表現から能動的な遊び】がはじまったりし【ごっこ遊びの成立】へとつながっていると認識している。子どもたちは【開放的で活発な活動】を選ぶことが多い。それは住居環境などに関連して【窮屈さからの解放】を求めているからなのではと考えている。それゆえ子どもたちは【動的あそび】を好む。</p> <p>【従来の読み書き学習との違い】として【遊びの効力】として【子どもの能動的な学び】を誘発させ、結果として【学習速度の速さ】など【学習効果の違い】を生むということを彼女自身が実体験から発見した。</p> <p>子どもたちに人気の砂場遊びでは導入後、砂の取り扱いに問題があったが【遊び方の改善】があった。遊びを通して【社会性習得へのつながり】や【衛生管理】などの身辺自立も身に付けていることを認識している。遊びを通した学びという【新しい学習アプローチ】は【楽しい学習であり】【子どもの学びへの自主性】を育む。【形や色、規律の学習】が見受けられ、それは【就学後に役に立つ知識】として期待されると考えている。</p>
	理論記述

- ・遊びは子どもが自然に求めるものである。ごっこ遊びを通じて思考力・表現力を使い、能動的に活発に動いて遊んでいることが見受けられる。
- ・遊びを通した学びは子どもたちに能動的な学びを誘発させ、結果として従来の読み書き学習より学習速度が早く、学習効果の違いを生んでいる。
- ・はじめは問題があった砂遊びだが、続ける中で社会性、衛生管理などを身に付け、遊び方に改善がみられる。
- ・遊びを通した学びは新しく、楽しめる学習アプローチであり、子どもは自主的に色や形、規律を学び、就学後にも生かせるスキルを身に付けている。

表4. 保育士③の保育実践（保育の実施形態、子どもたちの活動および様子）

保育士 ③	ストーリーライン
	<p>【子どもたちとの対話】から【子どもたちの選択への応答】をするように遊びが展開されている。【1～2時間の限定的な時間】である。その時間は【読み書き学習より、楽しみの重視】の時間であり【子どもにとって重要な時間】であると考えている。</p> <p>遊びをファシリテートするときは【安全に遊べる工夫】をする。【グループ分け】や【遊びの振り分け】をして【静的遊びと動的遊びの混在】をすることで【子ども同士のトラブルと回避】し【ゲームを楽しむことが可能】になると考えている。</p> <p>プロジェクトを通して【砂場遊びという新しいアイデアとの出会い】や【環境整備】、砂場の【使用方法と実践】についての学びを通して、砂場を【教材として取り入れることへの納得・受け入れ】があり【興味関心、学び】を得ることができたようだ。【子どもの自発的な学び】、【学びに向かう力】を育み【多様な知識の獲得】につながる。それは【進学後も活用できる学びの経験】である。</p>
	理論記述

- ・遊びは1～2時間の限定的な時間である。子どもたちとの対話や選択から遊びを展開し、楽しむことが出来る子どもにとって重要な時間である。
- ・安全性を考慮しながら静的遊びと動的遊びを組み合わせることで子どもたちが遊びを楽しみ、トラブルを減らすことが出来る。
- ・「砂遊びの導入」は新しいアイデアで、環境や使用方法など新しいことを学んだ。
- ・遊びの中の子どもたちの自発的な学びは学びに向かう力を育み、知識の獲得につながる。それは就学後も生かせるスキルである。

表5. 保育士3名の統合化理論記述

統合化理論記述	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもは遊びを通して自発的に表現力や思考力を使って活動する。その中で実体験を通じて教科的学習や社会性を育んでいる。</li> <li>・それらのスキルは就学後にも生かせるものである。</li> <li>・遊びから得られる楽しさは子どもたちが保育園への登園意欲につながる</li> <li>・子どもたちが遊びを楽しむことから、保育士の介入が減ったこと、子どもとの関わりがスムーズになるなどの変化があった。</li> <li>・遊びを通した学びは新しい学習アプローチであり、従来の学習方法より、学習速度が速く、学習効果の違いがある。</li> </ul>
---------	---



6.2. 保育士の役割について

表6は保育士①によるインタビューを分析したものを示す。また、表7は保育士②によるインタビューを

分析したもの、そして、表8は保育士③のインタビューを分析したものである。表9は保育士①, ②, ③の3人の理論記述を統合したものである。

表6. 保育士①の保育士の役割：保育士が保育を実施するにあたり、重要と思う事、気を付けている事

保 育 士 ①	ストーリーライン
	遊びを通した学びの実践にあたり保育士は【子どもとの対話】から【子ども中心となる保育スタイル】をとり、【子どもの主体的な活動を目指す】ことが必要である。 【子どもの行動】から【子どもの興味関心の汲み取り】を行い、【保育士から介入するのではなく】、【子どもの自主性を見守る】活動で、その中で保育士は【子どもの態度の変化】や【成長を発見して評価】することと考えている。
	理論記述
	・保育士は遊びを通した学びとして、子ども中心型の活動を実施する。 ・保育士からの働きかけではなく、子どもの自主的な行動、興味関心を見守る。 ・子どもの態度の変化や成長を観察する。

表7. 保育士②の保育士の役割：保育士が保育を実施するにあたり、重要と思う事、気を付けている事

保 育 士 ②	ストーリーライン
	【子どもの興味関心・性質理解】の観点から【子どもの主体性の尊重】をし、【強制的な遊びを否定】している。子どもたちに【自由な選択肢を与える】ことや子どもたち【自主的な遊びの尊重】が大切であるという考えのもと、遊びを通した学びを取り入れている。日常での子どもとの【対話】を通じた【子ども理解】も必要であり【ひとりひとりととの関わり】がそれぞれ違うと話した。 子どもを【観察することで子どもの実態把握】をすること【遊びを通した社会性の取得への導き】、【現地の文化に則した社会性】を身に付けられるよう関わるのが重要だと考えている。 コーナープレイについては【子どもの欲求】【子どもの選択】を子どもとの【対話から理解】のうえ遊びを決める。 【登園意欲の形成の優先】をしており、まず保育園という環境に慣れてもらうというような【段階的な学びの導入】に着目している。この【子ども目線の取り組み】が保護者の考え方の差になっている。保護者に向けて、遊びを通した学びを理解してもらうために彼女は【言葉の説明の否定】をしており、【実践からの理解促進】を図る。それは【子どもの姿の変化への気づき】から【保護者自身による納得】が必要だと考えているからである。彼女はこの経験から【遊びの意義理解】の【実体験】を通じた【保護者の同意への願い】を持っている。 読み書きすることが【文化の中の慣れ親しんだ学習方法】であって、【最善の学習方法】だと認識していた。しかし【遊びを通した学びと出会い】実践を通して【遊びの中にある学びへの気づき】があり、また【遊びを通して学んだ子どもの持つ創造力の発見】にもつながった。 プロジェクトを通じて【遊びの中の学びの存在】に気が付き、それは【新しい学習方法の発見】であった。
	理論記述
	・遊びは子どもの性質や興味関心を考慮し、子どもとの対話から自主性を大切にした活動を取り入れる。保育士から与えられる強制的な遊びではない。 ・観察や対話から子ども一人一人について理解しそれぞれに合った関わりをする。 ・子どもたちは遊びを通して現地文化に則した社会性、創造力を育む。 ・保護者は就学準備に対するニーズがあり、従来通りの学びを求めてくるが、遊びを通して子どもたちが学んでいることは、言葉ではなく、子どもの変化から理解し、納得してほしいと考える。 ・従来の学習方法は文化の中の慣れ親しんだ学習方法で、それが最善の学習方法だと考えていた。プロジェクトで遊びの中に学びがあることに気づき、新しい学習アプローチの発見と認識した。

表8. 保育士③の保育士の役割：保育士が保育を実施するにあたり、重要と思う事、気を付けている事

保育士 ③	ストーリーライン
	<p>【子どもの安全を守る業務責任】があり【子どもの安全に対する重責による疲労】があるが【子どもにとっては楽しみ】で【喜び】の時間である。【技術協力の受け入れ】によって【子ども中心型の保育】や子どもの【成長への注目】という視点を得ることができた。そのため、プロジェクトでの取り組みは今後も続けていきたい。保育園で遊びを取り入れることについて【保護者へ丁寧な説明】で【理解を促す】よう努めている。</p> <p>遊びをファシリテートするときは【安全に遊べる工夫】をする。【グループ分け】や【遊びの振り分け】をして【静的遊びと動的遊びの混在】をすることで【子ども同士のトラブルと回避】し【ゲームを楽しむことが可能】になると考えている。</p>
	理論記述

- ・ 保育士は安全管理するべき。グループ分けや遊びのバリエーションを増やすなどの環境面の工夫で、子どもたちが楽しめるように遊びを取り入れる。
- ・ 遊びを通した学びの実践から子ども中心型保育や子どもの成長への注目といった新しい視点を得、継続したい。
- ・ 保護者には丁寧に説明をすることで、遊びを通した学びについての理解を促す。

表9. 保育士3名の統合化理論記述

統合化理論記述	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 保育士は子どもの保育園における安全を管理する。</li> <li>・ 遊びを通した学びのために子どもの観察や対話から興味関心、ひとりひとりの自主性を大切にして、子ども中心型の保育を展開する。</li> <li>・ 保護者のニーズである就学準備を「遊びを通した学び」によって行うことの説明や子どもの変化への気づきを与えるよう関わる。</li> <li>・ 従来の学習方法から、新しい学習方法である遊びを通した学びを理解して実施するために、遊びの中にある学びについて認識する。</li> </ul>
---------	--

## 6.3. 保護者意見について

表10は保育士①によるインタビューを分析したものを示す。また、表11は保育士②によるインタビュー

を分析したもの、そして、表12は保育士③のインタビューを分析したものである。表13は保育士①、②、③の3人の理論記述を統合したものである。

表10. 保育士①の保護者意見：保育士が捉える保護者の「遊びを通した学び」に対する反応

保育士 ①	ストーリーライン
	<p>保護者の意見としては、【楽しそうにしている子どもの姿の変化】から【保育園における遊びという活動への理解】はあるものの、【もともとある学習へのニーズ】も依然として存在し【遊びと学習のつながりはないよう】である。遊びを取り入れることについての説明では【幼児期の発達理解】を促し、【子どもの行動】から【子どもの興味関心の汲み取り】を行い、【形、サイズ、大小などについての学習】を【実体験を通じて理解】できるように関わること、そして【楽しい活動や】【友達とのつながり】を通じて子どもにとって【好きな場所としての保育園】になることをその意義として説明する。それは子どもに保育園を【楽しんでほしい保護者の望み】とも一致する。プロジェクトを実施することで保護者は【保育園での活動の変化】によって、子どもたちが【泣かずに登園できるようになったという登園態度の変化】や子どもたちの抱く【保育園への安心感】などの変化について【親が疑問】を持ち始めた。それに対し、子どもたちが【保育園での遊びや楽しみを発見】したと【保育士は応答】する。</p>
	理論記述

- ・ 楽しそうな子どもたちの保育園での様子の変化から遊びについて理解する保護者もいる。
- ・ 多くの保護者は就学準備に対する意識から、遊びではなく学びの時間をとって欲しいと意見もあり、遊びと学びは完全分離で考えられている。
- ・ 保育士は遊びを通した学びについて、子どもの発達の特性から、興味関心を基本に、実体験を通じて学ぶこと、友だちとの関わりから保育園を好きになることと説明する。

表11. 保育士②の保護者意見：保育士が捉える保護者の「遊びを通した学び」に対する反応

保育士②	ストーリーライン
	保護者の遊びを通した学びに対する認識は高くなく、【保護者による学習重視】から、宿題や読み書きそのものの行為などといった【学び方の形式的習得】を求めている【学びの実質的習得度への無関心】が見受けられるため、保育園における遊びという活動はあまり好まれない傾向にある。一方保育士としては【登園意欲の形成の優先】をしており、まず遊びを通して保育園という環境に慣れてもらうというような【段階的な学びの導入】に着目している。これは【子ども目線の取り組み】方でもあり、その面では【保育士と保護者の学びに関する考え方の差】があり【保育園の抱える課題】でもある。【保護者にとっての保育園】は子どもたちが【学ぶ場】であり、学びへのアプローチは【目視確認できる子どもの学びの姿】と考えているためである。
	理論記述
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者は就学準備への高い意識があり、そのニーズは学びの形式的習得であり、子どもが学んでいる姿を確認したいと考えている。</li> <li>・保育園は子どもがまずは環境になれるなど、段階的に学習アプローチをしていきたいと思っている。</li> <li>・遊びを通した学びについての取り入れには、保護者との考え方の差があり、それは保育園の抱える問題である。</li> </ul>

表12. 保育士③の保護者意見：保育士が捉える保護者の「遊びを通した学び」に対する反応

保育士③	ストーリーライン
	【学びを重視する保護者】は【楽しい遊びと学びとを区別】している。 【就学準備に対する意識の強さ】から【保育園での学びの重要視】がされている。また、保護者にとって【遊びと学びの分離】がされており、遊びは学習の中には入らないことがある。
	理論記述
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者は遊びと学びは一体的ではないと捉えている。</li> <li>・就学準備に対する意識が強い。</li> </ul>

表13. 保育士3名の統合化理論記述

統合化理論記述	<ul style="list-style-type: none"> <li>・楽しそうな子どもの保育園での様子の変化から、遊びについて理解する保護者もいる。</li> <li>・多くの保護者は子どもに就学準備をしてほしいため、遊びではなく、従来の読み書き計算をする時間をとって欲しい。</li> <li>・遊びと学びは分けて考えている。</li> <li>・遊びを通した学びの導入について、保護者の意見との差があることは保育園の課題である。</li> </ul>
---------	--

6.4. 保育士としての向上について

表14は保育士①によるインタビューを分析したものを示す。また、表15は保育士②によるインタビュー

を分析したもの、そして、表16は保育士③のインタビューを分析したものである。表17は保育士①、②、③の3人の理論記述を統合したものである。

表14. 保育士①の保育士としての向上：保育士が考える保育士の質向上に有効な取り組み

保育士①	ストーリーライン
	セミナーやトレーニングを受けることで【専門性を向上】すること、【知識の習得】をし、自分の中に【咀嚼】し【落とし込む】こと、また、【保護者との連携】で【保育の質の向上】をすることができると考えている。
	理論記述
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・専門知識の取得で専門性の向上を図る。</li> <li>・保護者との連携で保育の質を向上させる。</li> </ul>

表15. 保育士②の保育士としての向上：保育士が考える保育士の質向上に有効な取り組み

保 育 士 ②	ストーリーライン
	保育士としてのスキル向上には【他園からの情報収集】や【子どもの心理発達に関する知識】の習得を挙げている。その一方で日常での子どもとの【対話】を通じた【子ども理解】も必要であり【ひとりひとりとの関わり】がそれぞれ違うと話した。
	理論記述
	・他園からの情報収集を行う。 ・子どもの心理発達に関する知識の習得をする。 ・子どもひとりひとりとの関わりを通じた理解が必要である。

表16. 保育士③の保育士としての向上：保育士が考える保育士の質向上に有効な取り組み

保 育 士 ③	ストーリーライン
	【幼児教育分野の専門知識への要望】があり【保育士として】【子どもの成長発達や特性への興味関心】を持っている。
	理論記述
	・専門知識の取得を行う ・子どもの成長発達や特性としての興味関心がある。

表17. 保育士3名の統合化理論記述

統合化理論記述	<ul style="list-style-type: none"> <li>・専門知識の取得で専門性の向上を図る。</li> <li>・保護者との連携で保育の質の向上を図る。</li> <li>・他の園からの情報収集を行う。</li> <li>・子どもひとりひとりとの関わりを通じた理解していきたい。</li> </ul>
---------	--

## 7. 考察

分析結果から出現したカテゴリごとに考察を示す。

### 7.1. 保育実践

モデル園では、保育士の子どもの【対話】から、【子どもの主体性】をもち【ごっこ遊びの成立】など【思考力・表現力から能動的な遊び】が展開されている。その遊びの中で、子どもたちが【形、サイズ、大小などについての学習】をしている事、【友だちとのつながり】から【社会性習得へつながり】を認識している。これらの要素は指導中心型保育の中にはあまり見られない「子どもの主体性」が存在することが示されている。保育の分野では幼児の特性上、他の校種のようにテストの点数による評価が難しい。その為、子どもの様子や変化を観察し把握することは次の活動につながるための重要な要素である。

また、子どもたちが遊びから取得したスキルは【就学後も生かせるスキル】であろうと、保育士は期待する。彼女らのこれまでの保育経験からも、活動を通して学んだ子どもたちが遊びの中で【自発的な学び】を

行うことが【進学後も活用できる学びの経験】であり【学びに向かう力】になると考えている。保護者ニーズでもある就学準備にもつながる要素である。

また、保育園での【楽しい活動】を経験することで、【子どもたちと過ごす時間が平穏に変化】するなど、登園態度にもポジティブな変化を認めている。

### 7.2. 保育士の役割

遊びを通じた学びを行うために、【子ども目線の取り組み】を考えられるような【観察】や対話というキーワードが出てきていることは大きな変化であると言える。それまでの指導中心型保育というスタイルから、子どもひとりひとりの存在を認め、関わろうとすることは遊びを取り入れる中で必要な視点である。その視点を手に入れたことは子どもたちに【自由な選択肢を与える】ことや【子どもの興味関心・性質の理解】などという発言からもわかる。【文化の中の慣れ親しんだ学習方法】である読み書きする学習が【最善の学習方法】だと思っていたところから、【実体験】を通じて「遊びの中にある学び」について気が付いたことも大きな変化であるといえる。そして、それは「遊びの



中にある学び」に気が付くために【実体験】を通じて理解することを強調しており、保護者へも【丁寧な説明】と【子どもの姿の変化への気づき】を通して理解を得たいと考えているようだ。活動を実践することから見えてきた子どもの姿や、その変化は、保育士たちにとって、とりわけ強いインパクトを与えたことがうかがえる。

### 7.3. 保護者意見

【就学準備に対する意識の強さ】から【学び方の形式的習得】を求めており、宿題や学習の時間の確保などで、子どもが「指導を受けている」ことを見ることで確認したいというのはこれまでの流れを考えると自然なことであろう。エジプトにおいて、2歳以下の子どもを持つ母親への質的調査において母親の子どもの成長発達に関し、心理・認知的発達に関する知識の低さと、そういった知識を手に入れる機会の乏しさも指摘されている (Elgibaly & Aziz 2016)。保護者理解を促すことは、ECD の効果と意義として浜野・三輪 (2012) の示す直積的效果の「家庭や地域との連携強化」「就学レディネスの向上」に直接つながることであり、それはいずれ、長期的効果として「学習結果の向上」や「教育に対する保護者の意識向上」にもつながっていくことが想像できる<sup>3</sup>。

また、【保育士と保護者の学びに関する考え方の差】が、【保育園の抱える課題】であると述べていることから、保育士はいわばプロジェクトの活動と、保護者意見との板挟み状態になっている状況が予想される。一方、上記でも述べたよう、保育士は保護者にも説明や実際に子どもの成長から「遊びを通した学び」の意義を感じてもらいたいとも述べている。

保育士や子どもの様子の変化を通じて遊びの効果を実感できるよう、時間がかかるが保育園からの関わりやプロジェクトの介入が必要になってくるであろう。このことは遊びを導入する際に、留意すべき点だといえるし、保護者が理解し、納得できるような導入の仕方は、今後検討すべき重要な課題であるといえよう。また、保護者の意見を取り入れることは、よりその文化的側面を反映した保育を生み出す可能性を秘めていると考える。

### 7.4. 保育士としての向上

保育士は【幼児教育分野の専門知識への要望】や【子どもの成長発達や特性への興味関心】などを示し、保育士としての専門性への意識を持っている。また、【保護者との連携】が【保育の質の向上】につながると認識していることも分かった。【他園からの情報収集】も向上に必要なだと述べている。これはプロジェクトの活動で、エリア内の保育園が集まり、活動進捗報告会を開催していることから、他園での取り組みが、刺激や参考になっていることが要因の一つとして推察される。また、保育士たちの持つ「遊び」のレパートリー自体が少ないことが予想され、毎日変化していく子どもと関わる中で、どのように遊んでいくかはファシリテートする保育士のアイデアにかかる部分であることから、他園からの情報収集の必要性を感じているのではないかと推察する。

## 8. 研究のまとめ

今回の研究では、JICA の技術協力プロジェクトである「就学前の教育と保育の質向上プロジェクト」でインターンに行った際に現場の保育士向けに実施したインタビューを分析・考察した。結果として、保育士たちがプロジェクトの介入から受けた変化としては大きく3つある。1つ目は保育士の持つ子どもへのまなざしである。指導中心型保育ではベクトルは教員から子どもへと一方通行であることが多い。しかし、プロジェクトの介入を受けて、保育士たちは子どもとの対話や観察から、子どもの興味関心、成長を把握しようとし、子どもから情報を受け取ろうとしていることが分かった。それ故、2つ目の変化として、保育園における子どもたちの活動も子どもにとって楽しいものとなり、保育園への登園態度や子どもと保育士との関わりのポジティブな変化となって表れていた。3つ目は、上記2つの変化に付随するもので、子どもたちとの活動を充実させるために、遊びに関するアイデアの必要性を感じていること、保護者との連携をするという考えを持っている事である。これは、遊びのレパートリーを増やすことと、「遊び」に対する保護者理解を求めるがゆえと考えられる。これは、現在の保育現場の課題ともいえる事項であろう。「遊び」という学習アプローチは、保育士にとっても新しい学習方法であったことから、同様に保護者にとっても、「遊び」

<sup>3</sup> 浜野・三輪 (2012) は ECD の効果と意義について、直接的効果と長期的効果の2タイプをまとめており、直接的効果としては、認知発達の促進、社会的情緒的発達の促進、身体的発達の促進、家庭と地域との連携強化、保護者支援・子どもの保護、子どもの権利保障を挙げており、それらをベースとした長期的効果として、留年・中途退学の減少、学習効果の向上、就学年数の増加、身体的・精神的に健全な発達、レジリエンス (リスク対応力) 向上、非行・犯罪関与の減少、教育に対する保護者の意識向上、収入向上を挙げている。

と「学び」が一体的であるということの理解に時間を有すること、保育士が説明や実態を見せる必要があることがわかる。しかしこの課題を解決するためには、保護者と保育園とのさらなる連携が必要であり、その連携は、ECDの持つ直接的効果、長期的効果にも結び付く関係であると考えられる。

最後に、インタビューを実施した際、回答者であった保育士たちの雰囲気は一言でいうと「前のめり」であった。回答するときのはきはきした話し口調や、新しい知識やアイデア、プログラムはないかとプロジェクトスタッフに問う姿からその印象を受けた。プロジェクトから受けた影響として、資格を有さない保育士という社会的地位の低いとされている仕事に、プロジェクトが介入することで、社会的に注目を向けられたということは、現場で日々業務に取り組む彼女たちのモチベーションにつながったのではないかと、保育士たちの雰囲気から肌で感じた。ECDに世界中が注目し、大きく取り上げられる昨今であるが、その草の根に目を向けると、一人一人がモチベーションを持ち、一歩でも前へと進もうと「前のめり」に日々子どもたちと向き合っているたくさんの保育士たちがいることを、記録しておきたい。

## 謝辞

JICA エジプトの「就学前の教育と保育の質向上プロジェクト」プロジェクト、リーダーの神谷哲郎氏、専門家の長谷川大氏、梶山葉子氏、また現地スタッフ、ナビル・ナシュワ氏、バサント・アフメド氏には、インターンに関わること、インタビューの実施に大きなお力添えをいただいた。また、JICA エジプトのスタッフ山上千秋氏も、インターン中の活動内で大変お世話になった。記して感謝の意を表したい。

## 参考文献

- Elgibaly, O., Aziz, M.M. (2016). Assessment of the needs of mother and primary healthcare providers to support early childhood development in Egypt: a qualitative study, *Child: Care, Health and Development*, 42(3), pp.394-401.
- 井上由美子 (2005). 『平成 19 年度 1 次隊「ボランティア活動報告書」』, JICA 図書館所蔵 (未出版).
- 大谷尚 (2019). 『質的研究の考え方 研究方法論から SCAT による分析まで』, 名古屋大学出版会, pp.270-277.
- 国際協力機構 (2016). 「エジプト・アラブ共和国基礎教育分野にかかる情報収集・確認調査」.(2020 年 10 月 20 日 閲覧): [https://openjicareport.jica.go.jp/240/240/240\\_405\\_12262440.html](https://openjicareport.jica.go.jp/240/240/240_405_12262440.html)
- 国際協力機構 (2016). 「事業事前評価表 国際協力機構人間開発部基礎教育グループ (2016 年度評価)」.(最終閲覧 2019 年 12 月 3 日): [https://www2.jica.go.jp/ja/evaluation/pdf/2016\\_1600483\\_1\\_s.pdf](https://www2.jica.go.jp/ja/evaluation/pdf/2016_1600483_1_s.pdf)
- 国際協力機構「就学前の教育と保育の質向上プロジェクト」.(最終閲覧 2020 年 10 月 12 日): <https://www.jica.go.jp/project/egypt/006/newsletter/index.htm>
- 日本貿易振興機構 (2020). 「エジプト概況 一般事項」.(最終閲覧 2020 年 11 月 16 日): [https://www.jetro.go.jp/world/africa/eg/basic\\_01.html](https://www.jetro.go.jp/world/africa/eg/basic_01.html)
- 浜野隆, 三輪千明 (2012). 『発展途上国の保育と国際協力』, 東信堂, 314pp.
- 持田彩 (2005). 『平成 19 年度 2 次隊「ボランティア活動報告書」』, JICA 図書館所蔵 (未出版).